

# 出雲大社境内遺跡

いずもおおやしろけいだいいせき



いろんなことが  
わかってきました!

詳しくは  
本文を

読んで  
おくれやす。



八雲立つ 雲太くん



和ニくん



京三ちゃん



# 巨大柱出現

1本では  
不安定な柱も  
3本束ねれば...



毛利元就の  
先取りやな



135cm

# 史上最大!! 三本束ねの柱

出土した宇豆柱（棟持柱）

平成12年4月5日の昼前。出雲国の一の宮出雲大社境内にある発掘現場に衝撃が駆け抜けました。なんとこれまでに見たこともない巨大な柱が顔を見せはじめたのです。そして発掘調査を進めていくと、3本のスギの木を束ねて1本の柱にするという、これまでの発掘では例のない柱であることがわかりました。柱は、1本の柱材が1m35cmもある大木で、それらを3本に束ねて直径3mにもなる巨大な柱です。発掘された柱では日本最大のもので、この柱と同じ仕組みが描かれた図面（『かなわごそうえいさしず金輪御造営差図』）が出雲大社の宮司家である出雲国造千家家に残されていました。これまでも昔の出雲大社は巨大な柱を用いた高層神殿であると言われてはきましたが、それを“実物”によって証明することはできませんでした。今回出土した巨大柱によってその本殿の巨大性について具体的な“実物”によって明らかにできるようになりました。

うすぼしら  
【宇豆柱】

この出土した柱は、本殿を構成する9か所の柱のうち棟を支える柱一棟持柱（宇豆柱）であると考えられています。そして、この巨大な柱の出現によって、高層神殿の存在がにわかに現実味を帯びてきました。



# 明らかになった巨大神殿

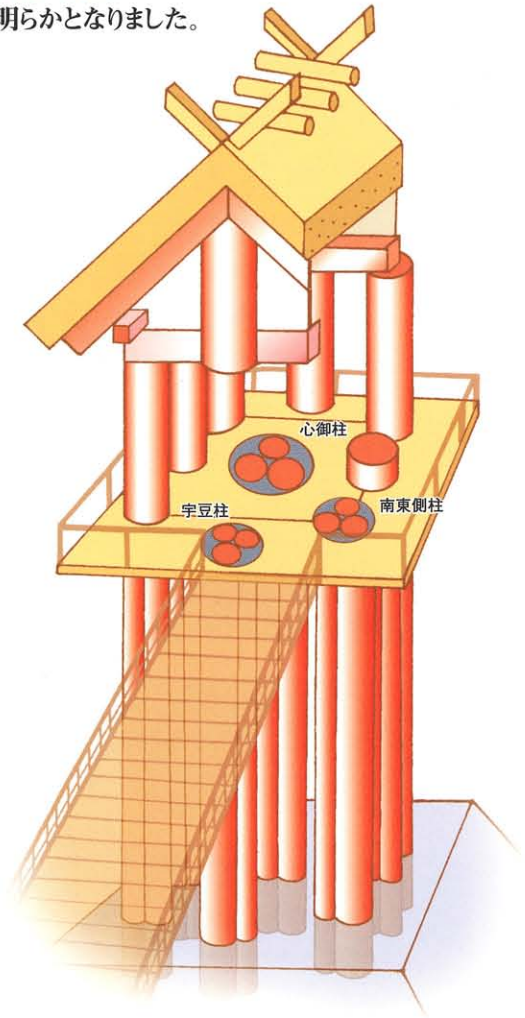
平成12年10月には、<sup>むなもちばしら</sup>棟持柱(宇豆柱)と同じ3本組みの構造をもつ柱がさらに2か所から確認されました。4月に出土した柱を宇豆柱とすると、10月に出土した柱は、<sup>しんのみほしら</sup>心御柱と南東側柱であると考えられます。他の2か所から柱が見つかったことによって、本殿の規模や向きが明らかとなりました。

## 【本殿規模】

平面規模は、現在の本殿とそれほど大きく変わりませんが、柱の直径が大きく違います。現在の宇豆柱の直径が0.87mであるのに対して、出土した巨大柱は、3本あわせた柱の直径が3mちかくなります。現在の本殿の高さは24mあり、神社では全国随一の高さを誇っていますが、言い伝えによると、古代の本殿の高さは48mあったといわれています。



出土した3か所の柱の位置関係



柱周辺から出土した遺物

## 巨大さを物語る遺物

巨大本殿に用いられた道具が柱の周辺から出土しています。特に注目したいのは、使用された鉄釘の大きさです。宇豆柱のすぐ上から出土した鉄釘は、長さ40cm以上で、本殿をつくる材木がいかに巨大であったかをものたります。そのほか3本の柱材を束ねるために使用されたとと思われる帯状の鉄器も出土しています。また柱の底部分からおまつり用と思われる鉄製の鋳が2点出土していますが、保存状態が非常に良いものでした。

## 【本殿の年代】

柱周辺からは、祭祀用の土器が出土しており、この土器から推定すると、平安時代終わりごろ(12世紀)から鎌倉時代始めごろ(13世紀前半)に建てられた本殿であると考えられます。



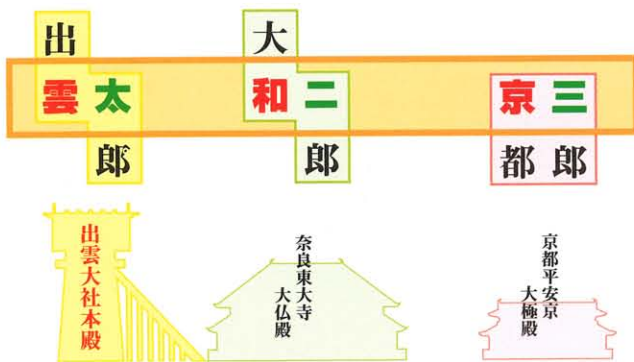
## 出雲大社の起源 『日本書紀』『古事記』の「国譲り神話」

この国土を天孫に譲られた大国主神の神殿は、高天原の神の宮殿と同じように「太い柱と厚い板を使って建てられた」と書かれています。出雲大社の神殿はその創建時から巨大な建物だったことがうかがえます。



## 高さ日本一の証拠!! 『口遊』

具体的な高さを知る手がかりは、平安時代中頃(西暦970年)に著された『口遊』に残されていました。そこには当時の大きな建物ベスト3として「雲太・和ニ・京三」の一文があります。



『口遊』の書かれた頃の東大寺大仏殿の高さは15丈(45m)あったことがわかっており、「雲太」つまり出雲大社本殿はそれ以上の高さであったことが読み取れます。  
一方室町時代ごろの言い伝えでは昔の出雲大社本殿の高さは16丈(48m)とも、さらに32丈(97m)とも言われてきました。また平安時代から鎌倉時代にかけて5~6回の本殿転倒の記録もあり、かなり大きな本殿が建っていたと思われます。

## 古代本殿の平面図! 「金輪御造営差図」を読む

虫食いのあとが...

### 「柱口一丈」

柱の直径がなんと1丈=3m!!

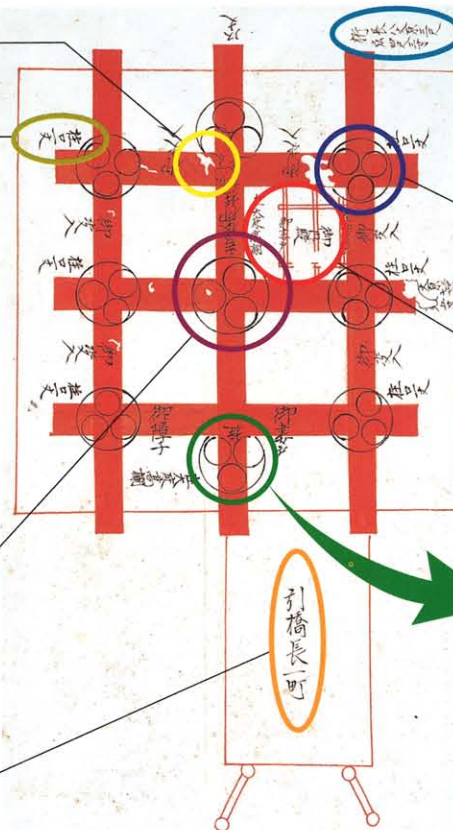


### 「岩根御柱」

中心の柱はひとまわり太く描かれています。

### 「引橋長一町」

本殿にあがるための1町=約109mの長い階段があったようです。



### 桁(けた)

長さ八丈=24m  
厚さ3尺=90cm  
幅4尺3寸=130cm

三本の柱材を一本に束ねている

外側の円は金輪(鉄の輪?)。図の名前はここからつきました。

御神座は現在と同様に西を向いておられたことがわかります。

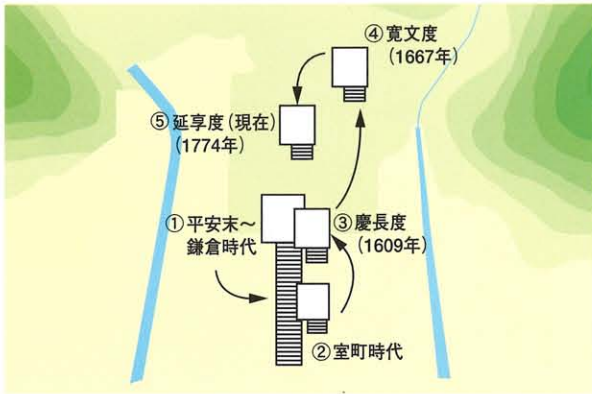


金輪御造営差図(出雲国造千家家所蔵)

実際に出土した宇豆柱



## 本殿位置のうつりかわり



出雲大社の境内は背後と東西を山々に囲まれており、その袋状の空間域では絶えることなく祭祀が営まれてきました。長い歴史のなかで、社殿はその姿と場所を少しずつ移しかえながら建てられていたことが、発掘調査によって少しずつわかってきました。



## これまでにわかったこと

### 【古墳時代前期】

炉跡・溝跡を確認、祭祀用土器・まが玉・白玉などが出土。

### 【平安時代末～鎌倉時代】

巨大柱を3箇所から確認、またその巨大性を物語る遺物の出土。

### 【室町時代】

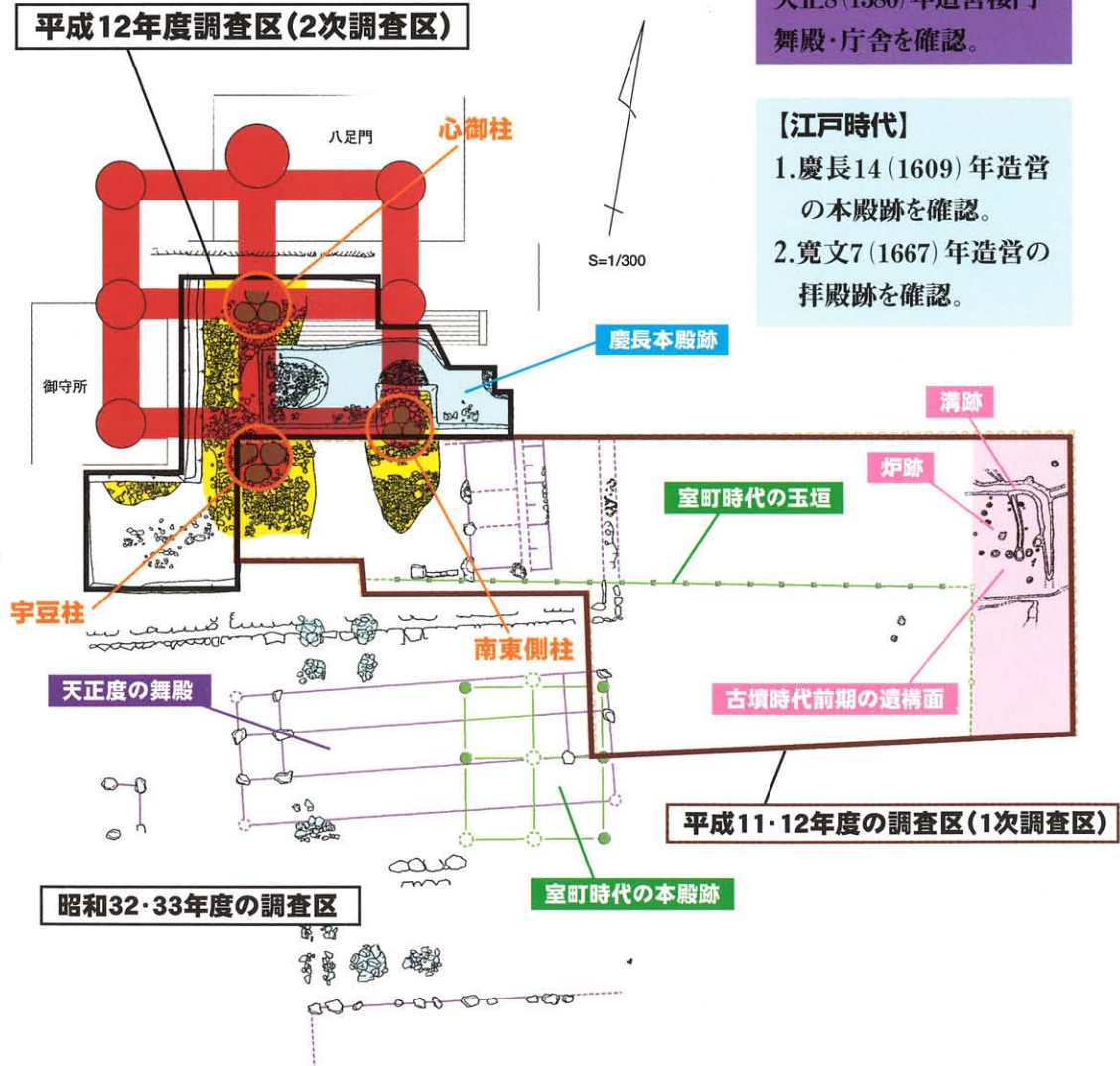
本殿跡や本殿を囲む垣跡(玉垣)を確認。

### 【戦国時代】

天正8(1580)年造営楼門・舞殿・庁舎を確認。

### 【江戸時代】

1. 慶長14(1609)年造営の本殿跡を確認。
2. 寛文7(1667)年造営の拜殿跡を確認。





# 出雲大社のれきし

## 縄文時代

(晩期)  
今から約2500年まえ

人々がこの場所  
で活動始める



## 弥生時代

(中期)  
今から約2000年まえ

真名井遺跡出土  
銅戈・ひすい勾玉



境内の東200m  
命主社の裏にある  
巨石の下から  
出土しました。銅  
戈は武器の形を  
した祭祀用の青  
銅器です。



## 古墳時代

(前期)  
今から約1700年まえ

祭祀用の土  
器片とまが  
玉2個、白玉  
12個が出土



まが玉・白玉



## 飛鳥時代

659年(斉明天皇5年)  
出雲大社造営の年記の明らかな初め。  
「出雲国造に命じて、**神の宮を修葺させた**」

それぞれ解釈が2説ある

神の宮	修葺
A: 出雲大社	A: 修理させた
B: 熊野大社 (八東郡八雲村)	B: あらためて造らせた



## 奈良時代

733年(天平5年)  
『出雲国風土記』編さんされる。

「大国主神の宮を造るため、神々が集まって  
杵でつき固め築いた。それゆえ出雲大社の  
ある地域を『杵築』と呼ぶ」



「出雲大社の柱材は、吉栗山(簸川郡佐田町)  
から切り出す」

## 平安時代

970年(天禄元年)

『口遊』に東大寺  
大仏殿(当時45m)  
より高い建造物と  
うたわれる。



復元模型48m(16丈)の本殿  
(島根県教育委員会提供)

1031年(長元4年) 社殿転倒

1036年(長元9年) 正殿式遷宮

31年 1061年(康平4年) 社殿転倒

1067年(治暦3年) 正殿式遷宮

47年 1109年(天仁2年) 社殿転倒?

1114年(永久2年) 正殿式遷宮

31年 1141年(保延7年) 社殿転倒

1145年(久安元年) 正殿式遷宮

45年 1172年(承安2年) 社殿転倒

1190年(建久元年) 正殿式遷宮

1225年(嘉禄元年) 社殿転倒

このころ参拝した寂蓮法師は  
「この世のことも思えない」  
と表現している。背後の山(八  
雲山:高さ100m)の半分近く  
あったという。

## 鎌倉時代

1248年(宝治2年) 正殿式遷宮

このころの境内を  
描いたといわれる  
絵図

「出雲大社并神郷図」  
(出雲国造千家家所蔵)



上の絵図をもとに復元した模型  
(島根県教育委員会提供)

1270年(文永7年) 火災

この頃に建てられたものと思われる。  
今回出土した巨大な本殿跡は



室町・戦国時代

本殿の規模が小さくなる

- 1282年
- 1325年
- 1386年
- 1412年
- 1442年
- 1467年
- 1486年
- 1519年
- 1550年
- 1580年

「仮殿式」遷宮



「室町時代の本殿を囲む垣跡(玉垣)」等間隔に柱が並んで出土しました。



1609年(慶長14年)

「仮殿式」遷宮



左の絵図をもとに復元した模型  
(島根県教育委員会提供)

「杵築大社近郷絵図」  
(出雲国造北島家所蔵)



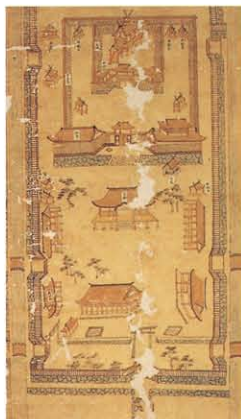
出土した慶長本殿の柱跡

江戸時代



1667年(寛文7年)

正殿式遷宮



絵図をもとに復元した模型  
(島根県教育委員会提供)

「杵築大社境内絵図」  
(出雲国造千家家所蔵)

1744年(延享元年)

正殿式遷宮



近代・現代



現在の本殿(国宝)が建てられる。本殿の規模・高さは寛文造営と同じであり、手前の拝殿は昭和34年に再建されたもの。



